

職権濫用

ストーカー警官に

手錠をされて

ドすけベクンニと

ハメ撮り中出し

で

ちやろレイプ

される話

POLCINE

職権濫用ストーリーカ警官に手錠をされてドすけベクンニ  
とハメ撮り中出しでぐちゃとろレイプされる話

朝倉 茉莉（あさくら まり）：私。中小企業の事務OLで、手取りは約17万円。築30年の古いアパート一階角部屋に住んでいる。真面目で人に頼れないタイプ。自分のことを後回しにしがち。友人関係が薄く、休日は一人で部屋にこもっていることが多い。

高峰 壮（たかみね そう）：30代。地域交番勤務の警察官。身長181cm、細身。細フレームのメガネ、黒髪、清潔感のある整髪。薄い唇。街では子供にも人気の爽やかなお兄さんの見た目。表向きは穏やかで誠実、地域住民からの信頼も厚い。しかし内面は支配欲と独占欲の塊で、好きになった相手への執着が常軌を逸している。感情を表に出さず、狂気を穏やかな笑顔の裏に隠す。一度ターゲットを決めると、職権を濫用してでも全てを知り、手に入れようとする。

私がこの街に越してきたのは、去年の秋のことだ。家賃の値上がりがあって、私の手取りじゃ払えなくなりそうになったので、必死に探していた。

駅から徒歩十四分、築三十年の二階建てアパートの一階の角部屋。家賃は四万二千元で、敷金礼金なしというのが決め手だった。日当たりはよくない。朝でも部屋の中は薄暗くて、昼間でも電気をつけないと手元が見えない。廊下はいつもじつとりと湿っていて、壁は黄ばんでいて、共用のポストは鍵が壊れたまま放置されている。不動産屋の担当者は申し訳なさそうな顔で「取り壊しの話も、まあ、出てないことはないんですが……変わらず入居者を募集しているので……なんとも」ともごも言った。出てないことはない、というのは要するに出ているということだろうと思ったけれど、私は「わかりました、ここにします」と即答した。とにかく安く、住めればよかった。

隣の住人はたぶん七十代のお爺さんで、朝の五時になると咳が聞こえてくる。その隣の部屋は空室で、二階には寡黙な老夫婦が住んでいると管理会社から聞いた。

た。アパート全体がしんと静まり返っていて、ときどき自分が世界から切り離された場所にいるような気分になる。でも別に、それでよかった。私の生活に、にぎやかさは必要ない。

朝七時に起きて電車に乗って会社に着いて、書類を捌いて電話を取って上司のコーヒーを入れてまた書類を捌いて、気づいたら夜の八時か九時になっている。帰りにコンビニかスーパーに寄って適当なご飯を買って、部屋に帰って食べて風呂に入って寝る。翌朝また繰り返し。休日は疲れて動けない。どこかに行こうと思ったことがないわけじゃないけれど、起き上がれないし、起き上がったとしても行く場所が思いつかないし、思いついたとしてもひとりで行く気にもなれない。だから結局、布団の中でスマホを見て、気づいたら夕方になっていることが多い。

それが私の、普通の毎日だった。六月の初めまでは。きっかけは、ひとつの落とした物だった。

六月の初め、出勤途中に財布を拾った。茶色い二つ折りで、駅前の横断歩道の脇に落ちていた。中を確認すると現金とカードと免許証が入っていて、ちょうど通勤路の途中に交番があったのでそのまま届けることにした。

引き戸を開けると、カウンターの奥に男の人が立っていた。細いフレームのメガネに黒髪、前髪が少し額にかかっている。すらりと背が高く、制服がよく似合っていた。

「おはようございます。どうしました？」

「おはようございます、あの、お財布を拾って…」

「ありがとうございます、わざわざ」

穏やかな声で言って財布を受け取り、それから書類を取り出してカウンター越しに差し出した。

「お手数ですが、こちらに記入をお願いします」

「はい。」

拾得物件預かり書、と上部に書いてある。届け主の住所、氏名、連絡先。落とし主が三ヶ月以内に現れなかった場合、拾得者に所有権が発生することへの同意欄。住所と名前と電話番号を書いて、同意欄にチェックを入れた。

「朝倉さんですね」

「は、はい。」

記入した書類を見ながら彼が言った。

「ああ、3丁目にお住まいなんですね」

「ええ、歩いて15分くらいですかね」

「そうなんですね。3丁目、あまり治安が良くないのはご存知ですか？我々もパ

トロールをしているのですが、なにかありましたらすぐ連絡して下さいね。」

「ありがとうございます。」

書き終えて書類を渡すと、ふと壁の名簿に目が止まった。交番勤務の担当者一覧が貼ってあって、顔写真の横に名前が並んでいる。高峰壮、とあった。

それだけの会話で、五分もかからなかった。私は交番を出て、そのまま駅へ向かった。仕事に遅れそうで急いで駅に向かうと彼の顔も、すぐに忘れた。

最初に気づいたのは、六月の終わりだった。

残業を終えて会社を出たのが夜の九時過ぎで、アパートに辿り着いた私は鍵を出しながら何気なく自分の部屋のドアを見て、足が止まった。ドアノブに、何かが下げられていた。

近づいて、息が止まった。

透明なビニール越しに中身はすぐわかった。コンドームだった。使われた後の、結んで処理されたそれがぶらぶらと揺れていた。頭の中が真っ白になって吐き気



と同時にサッと手足から血の引く感覚がわかる。しばらくその場から動けなかった。どれくらい立ち尽くしていたかわからないが、気づいたときには、ティッシュを何枚も重ねてそれを掴んでコンビニの袋に入れて、ゴミ袋の一番奥に押し込んでいた。鍵を開けて中に入ってチェーンをかけて、そのまましゃがみ込んだ。

誰かが、ここに来た。私のドアの前に立って、これをかけていった。その事実だけが、頭の中をぐるぐると回った。

誰かに話すことを考えたけれど、誰に話せばいいかわからなかった。会社の人には言いたくないし、友達は今はあまり連絡を取り合っている子がいらない。警察という選択肢も頭をよぎったけれど、こんなことで行っているのかわからなかった。立派な証拠はあるものの、でっち上げと思われるってしまったら意味がないし、大げさだと思われたら恥ずかしい。だから黙って私は何も無かったことにしたが、何も無かったことにはならなかったらしく、イタズラの間隔が短くなっていった。一週間後にはポストに封筒が入っていた。差出人は無く、部屋に入ってから開けると中から写真が出てきた。写真の中に白っぽい影が映っていて、よく見て気

づいた。私の部屋の窓だった。カーテン越しに室内の明かりが透けていて、人影は私だった。外から撮られてしまっている。写真を床に落とし、しばらくその場に座り込んだまま動けなかった。

ドアノブのコンドームは毎回使用済みで、一個だったものが二個になり三個になった。数が増えるたびに、私の中の何かがじわじわと削られていった。

ある朝、玄関を出るとドアの下コンクリートに湿った染みがあって、最初は雨かと思ったけれど雨は降っていなかった。鼻を近づけて、すぐに離れた。アンモニアの臭いがした。その日は会社でずっと吐き気がして仕事が手につかなかった。

自宅のパソコンにはメールも来るようになっていた。差出人不明のアドレスから週に2度か3度、直接差し込まれた画像には、大きく腫れ上がった男性器の写真が数枚貼られていて、私はそのメールを削除した。件名には毎回、私の名前が書かれていた、それもフルネームで。どこで知ったのか、それを考えると眠れなかった。

そうして二ヶ月が経った。限界まで疲弊すると人は思考を止めるようになる。怖いけれど考えたくないから見ないことにして、誰にも言えないからひとりで処理し続ける。毎日が怖かったけれど動けなかった。



七月の末だった。梅雨が明けたばかりで、夜になっても空気がまとわりついてくるような蒸し暑さが続いていた。月のない夜でアパートの外灯はひとつ玉が切れていて、駐輪場のあたりはほとんど真っ暗で自分の足元もよく見えないくらいだった。

外階段を上がらずに済む一階は引越した当初は便利だと思っていたけれど、今となってはそれが怖かった。誰でも簡単に、私の部屋の前まで来られる。

鍵を出しながらドアに近づいて——また、あった。今夜のそれは四個で、まとめて結わえられてぶらぶらとぶら下がっていた。数が増えるたびに慣れることが

できなくて、足が止まってバッグからティッシュを取り出しながら、手が震えているのに気づいた。

「——大丈夫ですか」

背後から、低くて穏やかな声がした。悲鳴が喉まで出かかって飲み込みながら振り返ると、駐輪場の端に自転車が止まっていて、その傍らに制服を着た人が立っていた。街灯の薄明かりに細いフレームのメガネが光っている。

「こんばんは。」

「ひっ！…ああ、こんばんは。」

「あ、怖がらせてすみません。どこかでお会いました…えーと、ああ、お財布を届けにきてくれた、確か朝倉さん？でしたよね？」

「あ、はい、よく覚えてますね。えと、確か…たか…なが…」

「高峰です。」

「ああ、すみません！」

「いえ、少しでも覚えてくれて嬉しいですよ。滅多に交番に貼られてある僕らのポスターなんて見る人いないですし。」

くすくすと笑う警官は、以前落とし元を届けた交番で書類を書いた日に対応をしてくれていた高峰さんだった。

「驚かせてしまいましたか。すみません、パトロール中で」

そう言いながら自転車を道路の端に停めて、警察手帳を見せながらゆっくり近づいてくる。こちらを威圧しないような歩き方だった。が、ドアノブを見た瞬間、穏やかだった目がすっと細くなった。

「これは」

「…たまにされるんです。こういうった事」

「…いつからですか？」

「2ヶ月前…だと思えます。」

答えた瞬間、高峰さんは深く息をついた。それから私を見た。まっすぐに、ちゃんと目を合わせられると、思ったより真剣な色をしていた。

「なんで早く言ってくれなかったんですか」

責めるような言い方ではなくて、困ったような少し悲しそうな声だった。

「相談しづらいのはわかってます。ですが、僕たちは人々の安心安全を守るためにいるんですよ？もう少し頼ってもらえたらよかった」

「すみません…：…どうしたらいいかわからなくて」

「謝らなくていいですよ、皆さん口を揃えて言いますから。怪我はないですか？」

「…：…ないです。身体的には」

「ほかにも何かありましたか、これ以外に」

「……いくつか、あります」

懐からメモ帳を取り出してペンを走らせる横顔は落ち着いていて、焦りも動揺も見えなかった。

「休みの日でいいので、交番に来てもらえますか。ちゃんと話を聞きます。今夜は中に入って、鍵をしっかりとかけて。チェーンも。」

「あ、はい。すみません。」

「いいんですよ、では。」

静かに笑うと、帽子のツバを摘んで少しだけ上にあげて会釈をすると踵を返して行く。私はその背中を見送りながら、ようやく少し息ができた気がした。

部屋に入ってチェーンをかけて、床にへたり込んだ。安心した。それだけは確

かだった。もう一人じゃないかもしれない、と思った。



次の休みに、交番へ行った。休日でも体は重くて、布団の中でぐずぐずして、昼前にやっと起き上がった。鏡を見ると目の下にくっきりと隈ができていた。外に出ると蒸し暑くて、八月の空は白く霞んでいて路地にはゴミの臭いが漂っていた。鍵を閉める時に、心してドアノブを見ると今朝は何もかかっていなくて、それだけで少し息ができた。

交番に着き、引き戸を開けると高峰さんがカウンターの奥にいて、こちらに気づくとすっと立ち上がった。

「ああ、まりっつ、こほんっ、朝倉さんこんにちは。来てくれましたか」

「あ、すみません、驚かせちゃいましたか？」

「いえ、とんでもない。さ、こちらに。」



一瞬名前を呼ばれた気がしたが、突然訪れたのでびっくりさせてしまったのは？とあまり気にしなかった。奥の小部屋に案内されると、パイプ椅子がふたつ向かい合わせに置いてある狭い相談室で、小さなエアコンがかすかに音を立てていた。

「ゆっくりでいいので、最初から話してもらえますか」

私はゆっくり話し始めると、自分でも驚いた。こんなにたくさんのが積み重なっていたんだと。口に出してみても初めて、二ヶ月間どれだけ怖かったかがじわじわと染み出してきた。高峰さんはずっと聞いていた。途中で遮ることも急かすこともなく、ただ静かに時々メモを取りながら。

「投函されていた写真、まだありますか」

「……捨ててしまいました」

「そうですか。パソコンのメールは？」

「消してないかもしれません」

「それは残しておいてください、証拠になります」

高峰さんはメモ帳から目を上げて私を見た。メガネの奥の目が、静かだった。

「怖かったですよね」

「……はい」

「よく二ヶ月、一人で抱えてましたね」

その言葉は妙に胸に沁みた。誰かに「よく頑張った」と言ってもらえたのが、  
いつぶりかわからなかった。

「これからは何かあったらすぐ連絡してください」

と言って名刺をテーブルに置いた。表に交番の番号、裏に手書きで携帯の番号が書いてある。

「裏の番号、直通です。夜でも出ます」

「……いいんですか、そんな」

「いいんです。前も言ったと思いますが、あの辺は治安が悪くて有名なんです。我々もパトロールはしているのですが、なかなかそう言った卑劣な犯人に出くわすのは難しくて。パトロールのルートを少し変えます。夜、あのアパートの前を通るようにしますから」

守ってもらえる、と思った。本当に、そう思った。

それから、高峰さんは頻繁に現れるようになった。夜遅く帰ると駐輪場のあたりに自転車が止まっていることがあって、「ちょうどパトロール中だったので」と言いながら私が部屋に入るまで外で待っていてくれる。帰り道で鉢合わせることもあって、駅からアパートまでの数十分を並んで歩いて、他愛もない話をした。

仕事のこと、天気のこと、この街のこと。高峰さんはよく笑う人だった。声を立てて笑うわけじゃないけれど、目元がふっと柔らかくなる笑い方をする。

ドアノブには相変わらずものが下げられることがあったけれど、高峰さんはすぐにその物を回収してくれた。

「もう少し待ってください、必ず特定します」

と、私を安心させるように言った。

ある夜、高峰さんが「確認したいことがある」と部屋に上がった。パソコンのメール履歴を見るためだと言って、私はパソコンのロックを開いて高峰さんに渡すと、高峰さんはフォルダを開いたりスクロールしたりした。ふと気づくと高峰さんの視線が画面じゃないところに向いていることがあった。キッチンの食器棚、洗濯物を干しているハンガー、廊下の突き当たりのドア。

「……何か気になることがありましたか」

「いえ。生活感があって、いいなと思って」

そう言って少し笑ったので、私もつられて笑った。その視線の意味を、深く考えなかった。

また別の日、なんとなく食の話になったとき、高峰さんが「朝倉さん、納豆好きですよ」とさりと言った。「好きですけど、なんで」と聞くと「なんとなく、そんな気がして」と笑いながら答えた。それだけだった。でも私は納豆の話を、高峰さんにした記憶がなかった。

仕事帰り、コンビニに寄って出てきたところで高峰さんと鉢合わせた。

「あ、お疲れ様です」

「お疲れ様です。パトロール中ですか」

「ええ。ちょうどこの辺りを回っていたところで」

自転車を押しながら、いつもの穏やかな笑顔で言った。

そのままなんとなく並んで歩いた。コンビニの袋を持った私の隣を、高峰さんが自転車を押しながらゆっくり歩く。夏の夜の蒸し暑さの中で、制服姿の高峰さんは少し汗をかいていた。

「今日も遅かったんですね」

「残業が続いています」

「無理しないでくださいよ」

さらりと言った。心配しているのか、それとも世間話なのか、よくわからないトーンだった。

アパートの前まで来ると、高峰さんは自転車を止めて私がドアノブを確認するのを待っていた。今夜は何もかかっていなかった。

「最近、減ってきてますよね。ドアノブのやつ」

「そうなんですか」

「ええ、パトロールも増やしてますし、なんとかかなりそうな気がしてます」

根拠のない言葉だった。が、その言葉を信じたかった。

「ありがとうございます、高峰さん」

そう言うと、高峰さんは少し目を細めた。

「お礼なんていいですよ。当然のことをしてるだけなので」

踵を返して自転車にまたがった高峰さんが、走り出す前に振り返った。

「ちゃんとご飯食べてくださいよ。冷蔵庫、あまり入ってなさそうだから」

「え？ ああ、はい。ありがとうございます…？」

走り去る背中を見送りながら、私はその言葉を反芻した。

冷蔵庫の中身を、なんで知っているんだろう。

でも次の瞬間には、部屋に入ったときに見えたのかもしれない、と思った。そう思うことにした。

そういう小さな「あれ？」が、八月に入る頃にはいくつか積み重なっていた。でも私はそのたびに理由をつけて忘れた。覚えていてくれる、気にかけてくれる、そういう人なんだ、と思った。怖い二ヶ月を一緒に乗り越えてくれた人を疑いたくなかったし、守ってくれている人を疑う気持ちになれなかった。



夜九時過ぎ。疲れ果ててアパートに帰り、鍵を開けてドアを押し開けた瞬間、



私は固まった。薄暗いはずの部屋に、明かりがついている。

心臓が嫌な音を立てて跳ね上がった。強盗、それともあのストーカーが中にいるのか。パニックになりかけた私の目に飛び込んできたのは、リビングの真ん中に真っ直ぐに立つ、見慣れた制服だった。

「あ、朝倉さん。おかえりなさい。驚かせてすみません」

高峰さんだった。

制服の上着はきっちりと着たままだが、帽子はローテーブルの上に置かれ、いつも整っている黒髪が少しだけ額に張り付いている。夏の夜のパトロールのせいか、ほんの少し息が荒い。

「高、高峰さん……？なんで、部屋に……」

「すみません、本当に。実はさっき、この近辺で不審者の目撃情報がありましたね。朝倉さんのアパートの周りを調べたら、あなたの部屋のベランダの窓が、少

しだけ開いているのが外から見えたんです。声をかけたんですがお留守のようでしたし、万が一、事件の可能性も考えて、緊急で中を確認させていただきました」「え……あ、そう、だったんですか……」

あまりに理路整然とした警察官としての説明に、私の体からすっと緊張が抜けた。

なんだ、守ってくれていたんだ。窓の鍵をかけ忘れた私が悪かったのだ。

「驚かせてしまって申し訳ないです。でも、これで安心ですよ。ベランダも、今は僕が内側からすべて施錠しましたから。あ、朝倉さん、玄関の鍵いま閉めてもらえますか？物騒ですからね。」

高峰さんはいつもの穏やかな笑みを浮かべ、細いフレームのメガネの奥の目を優しく細めた。私は言われるがまま鍵を閉めてチェーンも掛けた。

ワンルームの狭い空間のせいで、彼の体から発せられる熱気と、ワイシャツの

のりが汗に馴染んだような、男らしくて重たい匂いがダイレクトに鼻腔を突いた。

「ありがとうございます……わざわざ、部屋の中まで見ていただいて。あの、不審者はもうどこかへ？」

「ええ、我々の仲間が今、駅の方へ追っています。……ただ、少し気になったことがあって」

高峰さんは一步、私の方へ歩を進めた。よほど慌てていたのだろう靴も脱がずに立っている高峰さんが土足で床を静かに踏む音が、やけに大きく響く。

「気になったこと、ですか？」

「ええ。朝倉さんの部屋の、キッチンの方なんですが」

高峰さんは私の背後にある薄暗いキッチンを、顎で小さく指した。

「キッチンの棚の鉄分のサブリ、もうなくなりましたか？先週まであったのに」  
「…………え？」

心臓が冷たい水に浸されたようにひやりとした。キッチンの棚なんて、ベランダの施錠確認には一切関係がない場所だ。それに、あのサブリは棚の奥に押し込んであって、扉を開けないと見えないはずだった。誰かに話したことは一度もない。外から見えるはずがない。

「それから、冷蔵庫の横のゴミ箱。あの一番奥に、小さなコンビニの袋を押し込んでありましたよね。……僕が君のドアノブに掛けておいた『使用済みのやつ』、わざわざティッシュに何重も包んで隠したでしょう。朝倉さん、ちゃんと隠したつもりだったのかもしれないけど、あれ、僕が回収して中身を確認しましたよ。僕のあげたものをそんなところに捨てるなんて、冷たいなと思って」

高峰さんの声は、相変わらず低くて、穏やかで、聞き取りやすい。

けれど、その声のトーンとは裏腹にメガネの奥の瞳からは一切の感情が消え失せていた。完全に据わった目が、じっと私を値踏みするように見下ろしている。

「高峰、さん……？ 何を言って——」

「言ったでしょう。3丁目は治安が悪いんです。だから、僕がずっと、あなたを見守ってあげなきゃいけない」

高峰さんは静かに、私の逃げ道を塞ぐようにもう一步距離を詰めてきた。

制服の胸元で、金色に輝く警察の旭日章が、部屋の蛍光灯を反射してギラリと光った。

手首を掴まれた。振り解こうとしたけれど力が違いすぎた。くるりと体を反転させられて、気づいたときには後ろ手に両腕を固定されていた。冷たい感触が手首に走って、金属の音がした。かちやり、と。後ろ手に、手錠をかけられていた。

「やつ……やめて、やめてください、こんな……っ」

「落ち着いて、大丈夫ですからね？」

後ろから高峰さんの声がした。耳のすぐ近くで、静かに、穏やかに囁かれる。私は高峰さんを振り解けように暴れる。

「手錠、痛いですか？ 暴れるから食い込んで痛いんですよ。ほら…っ、…動かないで。大人しく僕の言う通りにしてれば、痛くならないって言ってるでしょう」

言われた通り、動かたばに手錠の縁が食い込んだ。

「そう、そのまま。大人しくしてたら痛くないから」

肩に手が置かれて、ゆっくりとソファの方に誘導される。メガネの奥の目が、じっと私を見ていた。穏やかで、静かで、怖いくらい真剣な目だった。狭い部屋に鎮座してあるシングルベッドに座らされると隣にドサリと座る高峰さん。私は

絞り出すような声で言った。

「……なんで」

「なんで？」

繰り返した瞬間、何かが変わった。

ずっと穏やかだった声が、少しだけ上擦った。膝の上に置いていた手が、ぎゅっと握られた。メガネの奥の目が、初めて、ちゃんと笑っていた。

「なんで、って……好きだからですよ。好きだから、に決まってるじゃないですか。財布を届けてくれたあの朝から、ずっと、毎日、朝倉さんのことしか考えてないんです。交番に入ってきた瞬間に、あ、この人だって思ったんです。なんで、なんて聞かれても困る。僕だってわからないんですから。ただ、もうあなたしか見えなくなってた」

一息で言った。それまでの静かな話し方と全然違って、言葉が止まらなかった。

「書類に書いてくれた住所を見て、ここだって思って。その日の夜、パトロールのついでに来てみたら、窓に電気がついてて。あ、帰ってきたんだって思ったら……もう毎晩来ずにいられなくて。最初は外から見てるだけでよかったんです。本当に、それだけで十分だと思ってた。でも全然十分じゃなかった。もっと知りたくて、もっと近くに行きたくて、気づいたら鍵を開けちゃってました。30秒もかかりませんでしたよ。部屋の中も全部見た。食器棚の中も、冷蔵庫も、クローゼットもゴミ箱も。お風呂場は朝倉さんが使ってるシャンプーの匂いがして、それだけで頭がおかしくなりそうだった。納豆が好きなのも、コーヒーはブラックで飲むのも、全部ここで知った。本人に聞いてないのに、全部知ってる。」

恐怖で高峰さんの話しなんて半分も頭に入ってこない。それに私を見た目が怖かったが、高峰さんはただ好きな人に向けるような純粹な目だった。



「コンドームも、最初は衝動だったんですよ。計画してたわけじゃない。けど、朝倉さんの事を考えて出した精子をどうにかして見せつけたくて…。ドアノブに掛けたその夜、朝倉さんが見つけて、青ざめて、震えて…。その顔を見たら、また見たくなくて。仕掛けるたびに毎回確認してたんだ。隠れて。どんな顔するか。どれだけ怖がるか。ひどいと思う、わかってる。でも怖がって泣いてる朝倉さんも全部きれいで…。全部僕だけが知ってると思ったら、やめられなかった」

私は恐怖でゾツとして、声が出せずにいる。

「メールも、毎回パソコンを開くたびに、今僕のことを考えてるんだって思えて送り続けました。あのメールアドレス、部屋に忍び込んだときにパソコン開いて控えたんですよ。パスワードもすごく簡単だった。件名に名前を書いたのは、名前を呼びたかったから。声に出して呼べないから、文字にした。朝倉さんのことを考えない日が、この二ヶ月間、一日もなかった。仕事でも、眠れない夜も、ずっとずっと、朝倉さんのことだけ」

目の前に立った。後ろ手に縛られたまま、私は逃げられなかった。

「もう限界なんだ」

声が初めて掠れた。

「遠くから見てるだけなんて、もう無理。隣にいるのに触れられないのも、声をかけるのに名前前で呼べないのも、全部もう無理で。今夜来たのは、そういうことだよ。捜査とかパトロールとか、そんな話じゃない。ただ、朝倉さんのそばにいたくて。朝倉さんに僕のことだけ考えていてほしくて」

「う、嘘ですよそんなの…!!」

「嘘?…どうしてそんな事言えるんです?今朝倉さんの家に入ってるんですよ?あーそっかそっか…防衛反応ですか、認めたくないんですよ?そうですよね、怖いですよね」

高峰さんはローテーブルに置いてある私のノートパソコンを起動させた。

「やめて、それ触らないで——」

「大丈夫ですよ。」

起動画面にパスワードの入力欄が出た。高峰さんの指が迷いなく動くロックが外れた。

「な、なんでパスワード知ってるんですか」

「朝倉さんの事ならなんでも知ってます。同僚、それに親御さんからのLINEの内容も。最近パソコンからLINEにログインしてないみたいで、見れなくなったのは残念ですが。男友達がいないとわかって安心しました。それに、いつもはパソコンでエッチな動画見てたんですね。」

「…」

高峰さんは淡々と話ると、指がマウスパッドをスクロールして、迷惑メールのフォルダを開いた。届くたびに見ないようにしていた、あのメールたち。

「あった」

静かに言って、パソコンを持ち上げてこちらに向けた。添付された画像が開いていたが、私は顔を背けた。

「やめて……見たくない、そんなの——」

「ううん、見てください、ほら。」

画面に大きく映し出される大きくそそり立つ男性器。高峰さんは私の顎を持ち顔を画面に向かせた。

「っ…」

「ああ、コレだけじゃわかんないか…」

高峰さんは立ち上がってベルトを外したときにどさっと重い装備が床に落ちる。靴とズボンを脱ぐとボクサーパンツには既に大きくなっている竿が、布地を内側から強く押し上げていた。太い輪郭がくつきりと浮き上がり、先端部分がパンツのウエストバンドからわずかに顔を覗かせている。赤黒く腫れ上がった龟头が、半分ほど露出して脈打っていた。ゆっくりとボクサーパンツの前面を下ろした。解放された竿が、重たげにぶるんと跳ね上がる。予想以上に太く、長かった。

「……っ！」

「この画像、皮のところにほくろが2つ並んでるでしょ？で、僕のここにあるほくろと見比べて？位置もサイズも完全にビンゴですよね？」

血管が浮き出た竿の中央が反り返り、龟头はすでに怒張して先端の尿道口が開

き、透明な液を垂らしている。大きさを物語るように、根元から先端までが私の顔の近くに迫ってくる。

「や、やめてくださいっ…！」

「こら、ちゃんと見て」

顔を背ける私の頬を竿でぺちぺちと叩く。

竿を右手で根元から握り、わざとゆっくりと顔の前で左右に振った。太い竿が空気を切るたびに、むわりと汗と尿で蒸れた匂いが鼻を掠める。

赤黒く腫れ上がった亀頭のすぐ下、包皮の左側にくつきりと浮かぶ二つのほくろが、目の前で揺れていた。一つは小さく、もう一つは少し大きめの薄茶色のほくろ。画像と一致する。

「この二つ……ちゃんと確認できましたね。コレで僕のって分かったでしょ？朝倉さんが怯えてる顔を見るだけで、いつもここが熱くなって……」

高峰さんは親指で自分の包皮のほくろ部分を軽く擦りながら、甘く掠れた声で囁いた。すると竿がびくん♡と大きく跳ね、透明な我慢汁がさらに溢れて私の唇の端にかかった。

「っ…」

「っはぁ…ねえ、僕のちんぽ朝倉さんのためにこんなに腫れ上がってる。触らなくてもわかるでしょ？ほら、ちゃんと口開けてください。僕のちんぽ舐めてくださいよ…」

高峰さんは甘く蕩けるような声で囁きながら、熱く脈打つ太い竿を私の唇にねっとりとしりすり♡ すりすり♡と擦りつけていた。大量の我慢汁が唇全体にべっとりと塗り広げられ、糸を引いて滴り落ちる。

「んんん…っ！（絶対口開けてやるもんかっ…！）」